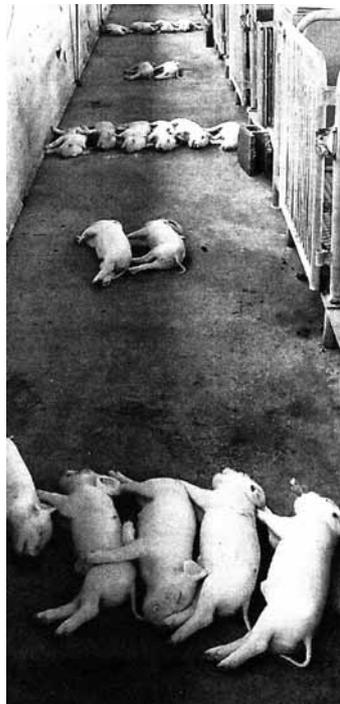


ウシ、ブタ、ウマなどの家畜、ニワトリ、アヒルなどの家禽、彼らは私たち人間に食べられ使役されるための「産業動物」として飼養される。なかでも経済性、経済効率を重視する場合、彼らは“経済動物”と言われることもある。

2010年5月18日、マスコミ各社は宮崎県で家畜伝染病の口蹄疫が発生したと一斉に報じた。感染が集中した川南町では、あちこちの農場入口や幹線道路に消毒剤がまかれ、周辺の市町村でも同じような対策が実施された。そしてこの日、東国原英夫宮崎県知事は非常事態を宣言し、この日から、目に見えないウイルスとの闘いが始まった。最終的にこの騒ぎが収束したのは同年7月27日午前0時だった。

今回の騒ぎで、ウシとブタなど合わせて288,643頭（内訳はウシ68,266頭、ブタ220,034頭、ヤギ・イノシシなど343頭）が殺処分され、牛肉や豚肉として食されることなく土中に埋められた。最も多かったのはブタで、全体の76%を占めた。原因となった口蹄疫ウイルスは、感染力が非常に強く、このウイルスに感染すると肉質は低下し、乳用牛であれば搾乳量が減り、発育障害を起こすことが畜産業界では問題となっている。今回はおよそ1,000億円の損失があったと試算された。家畜がこのウイルスに感染して病気を発症すると経済的価値が低下することから、殺処分されたのである。“経済動物”と言われる所以がここにある。



口蹄疫で次々と死んだ子豚。朝日新聞記事(2010年6月8日付)より。宮崎県川南町、森本ひさ子さん撮影。

そもそも口蹄疫とは何か？

口蹄疫は口蹄疫ウイルスによって引き起こされる家畜の伝染病で、日本では、家畜伝染病予防法において法定伝染病に指定されている。対象となる家畜はウシ、ヒツジ、ヤギ、ブタのほか、同施行令でスイギュウ、シカ、イノシシが追加指定されている。また国際獣疫事務局(OIE)リスト疾病にも指定されている。

発症すると、ウシでは初期のころには口腔内に水疱ができ、その後多量のよだれを出す。ブタでは鼻の周囲に水疱ができる。またウシ・ブタの蹄の周りにも水疱ができ、熱を持つ。口と蹄に症状が現れることからこの病名がつけられた。致死率は成獣で数%、幼獣で20%程度という。

この病気は、蹄が二つあるいは四つに分かれた偶蹄類(ブタ、ウシ、スイギュウ、ヤギ、ヒツジ、シカ、イノシシ、カモシカなど39種)にかかりやすく、げっ歯類(ネズミなど11種)やゾウ、カンガルーなどにも発症することがある。しかし、人間は濃厚な接触がない限り感染し発症することはない。

この病気を発症させる口蹄疫ウイルスは、直径21～25ナノメートルの球形をなし、RNAを遺伝情報担体とするRNAウイルスである。血清型は7種類が確認され、2000年に宮崎で発生した時も、今回の2010年の場合も、同じO型だった。またこのウイルスは、pH7.5で加熱すると61℃では30秒間で、55℃では120秒間で不活性化するが、4℃では18週間も活性化を維持する。

このウイルスの特徴は、伝染力が強く、人間や物、野生動物などの移動のさい広範囲に拡散したり、活性化を維持させながら黄砂に乗って日本へやって来ることにある。このように感染力が非常に強いことから、生物兵器としての研究もおこなわれている。ただ、感染力が強いからといって、このウイルスによる家畜の致死率が極端に高いわけではない。

口蹄疫問題の教訓とは何か？

今回の宮崎県での事例は、“経済動物”としてのウシ・ブタを再確認させられるものだった。マスコミで総括されている今回の問題点は、一つ目が口蹄疫個体の確認遅れと遺伝子検査の活用化、二つ目が確認後の速やかな殺処分と埋土、三つ目が大型動物を扱うことができる獣医師不足、四つ目が県と国との間の連携の不十分さである。これらの総括は、肉質の低下、搾乳量の減少、発育障害といった“経済動物”としての価値下落に対する反省点からである。

しかし、果たしてそれだけの視点で「口蹄疫問題の解決」としていいのだろうか？

1997年、台湾でも口蹄疫が発生し385万頭のブタが殺処分された。しかし、人間への被害は全くなかった。また、2000年3月25日、宮崎県で発生した口蹄疫のさいも、人間への被害は全くなかった。ただ今回と同様、“経済動物”として畜産業界に大きな損害を与えたのは事実であった。

一方、1998年9月、マレーシア北部でブタの呼吸器感染症(ニパウイルス感染症)が発生し、クアラルンプール近郊の大規模養豚地域にまで拡大したことがあった。最終的には100万頭におよぶブタが殺処分された。この感染症は人間にも感染して神経症状を起こし、致死率も高いことが知られている。患者は1999年12月までに283名が確認され、109名が死亡した。この感染症は、明らかに人間に健康被害を及ぼす病気だった。そのような意味において、口蹄疫とは異なる病気である。

ウイルスに感染し口蹄疫を発症したウシ・ブタの肉を食べても、人間にはまったく問題は起きない。殺処分された家畜の肉を加熱してウイルスを不活性化させ、何らかの方法で食すれば彼らの命を私たち人間の命の一部としてつなぐことはできるはずである。産業動物であればなおさらのことである。大量殺処分されることは法律上仕方ないとしても、食べずに埋土することはもったいないこと、申し訳ないことではないだろうか。

ウイルスに感染してもしていなくても、“経済動物”として価値が下落したから埋土は仕様がないうということでもいいのだろうか。本当に、私たち人間は口蹄疫問題に対して最善を尽くしたのだろうか。今でも疑問が残る。(つづく)